



通信(モールス信号)の授業風景「写真集土浦」市川彰編より

霞ヶ浦(その11)～予科練の訓練～

土浦海軍航空隊には全国から多数の予科練習生(甲飛第8期～16期・乙飛第15期～20期・丙飛第2期～10期、16期)が入隊してきました。予科練では早朝6時の総員起こしから、夜9時の巡検(就寝状況の確認)まで、全てが訓練。14才から20才未満の少年たちは、海軍軍人としての礼節を身につけるとともに、心身を徹底的に鍛え上げられていきました。その訓練の様子を戸張礼記氏(中学45回・甲飛14期・2次)からお聞きました。

土浦中学から予科練へ

戸張礼記氏は昭和3年11月7日のお生まれ、小さい頃から飛行機が大好きでよく模型飛行機を作り、競技会で賞を貰ったこともありました。今の少年たちが野球やサッカーの選手に憧れるのと同じように、当時の少年たちは空を愛し、飛行機に憧れを抱いていました。1941(昭和16)年4月に土浦中学へ入学(中学45回)、1年時の担任は山崎長次郎先生。部活動は滑空班(グライダー部)に所属、顧問は入江信太郎先生と沼尻正男配属教官。部長は大塚(大熊)嘉孝(中学43回・甲飛13期)さん、先輩には土浦まちかど「蔵」の館長をされていた鶴田重郎(中学44回・甲飛13期)さんがいました。滑空班のグライダーはゴム索を人力で引つ張って飛ばす「プライマリ」と呼ばれた初級機、飛行距離はグラウンドの端から端まで、高度はせいぜい5mくらいでしたが、初めて地上を離れた時の感激は、86才の今も忘れられません。漠然としていた空への憧れが一段と強くなりました。

1944(昭和19)年、志願して予科練の試験に合格、4年生の1学期半ばの6月1日、土浦海軍航空隊に甲種飛行予科練習生の14期生(2次)として入隊、16才でした。滑空班からは他に萩原藤之助・飯島(若泉)福雄の2名が、土浦中学全体では約10名が同期で入隊しました。

1ヶ月後の7月には土浦中学と土浦高等女学校(現土浦二高)の4年生計440名が第一海軍航空廠(現陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地)に学徒動員になりました。もし実戦に参加することになったら、同級生たちが精魂込めて作った飛行機に

乗り、敵艦めがけて体当たりをしていたかもしれません。

入隊の動機は父の急死という家庭の事情もありましたが、なによりも大空へのあこがれ。募集のポスターや予科練の映画「決戦の大空へ」等で描かれた予科練生のイメージが良かったことでした。

「決戦の大空へ」のロケ(土浦中学のグラウンドでの跳び箱の場面)はちようど教練中で、その様子を横目で眺めていましたし、亀城公園でのロケも自転車通学の途中で見えていました。わずか16才、お国のためといった大義などは考えも及ばない少年でした。当時の軍国少年たちは、愛する家族を守り、祖国の平和を守ろうと、大好きな飛行機に自分の夢を載せ、国家の期待を重ね載せて、奮い立つたと言われていますが、それは結果的にそうなったのであって、当時は飛行機少年たちの憧れであった「零戦」に、とにかく乗りたかったのです。予科練の海軍教授であった倉町秋次教官もその著『予科練外史』の序文の中で「予科練の少年たちは、特別な少年ではなかった。普通の少年で、強いて違ふところと言えば、大空を愛し格別に飛行機が好きであったという位であろうか。彼らにはあまりに純真であり、それ故にか血と涙が多すぎると、そんな少年が多かった。そのような少年たちが国難に対して、献身した。燃えた。そして8割が戦死した。」と述べています。

罰直

予科練の課業や訓練はすべて班行動でした。1個班は約20名で、下士官が教員や班長を務めていました。6～8個班で1分隊を構成し、士官が分隊長(中

尉・大尉)、分隊長(少尉・准士官・予備学生)や教官を務めていました。

入隊するとまずは吊り床(ハンモック)訓練。海軍では狭い艦内を有効に使うために寝るのはハンモック。寝る場所作り(家庭生活では布団の上を下ろしに相当します)がハンモック訓練、これがびっくりするものでした。1分以内に「吊り床納め」「吊り床下ろし」ができれば罰直を食らいました。この吊床が戦闘のときには防弾覆い、船が沈没したときには浮き袋にもなり、我々兵員の生命を守る大切なものであるから、水の入らないよう硬く括らなくてはならないと教えられました。括られた吊床は、まるで人間一人を縛りあげたような形をしており相当な重さで、硬いロープやキャンパス生地が使われているので、手の皮が剥けて、血が滲んできます。こんな思いをしながら、1、2分のできるようになるまでには1ヶ月くらいかかりました。

入隊後の訓練は吊り床訓練に始まり、徹底的に鍛え抜かれて、毎日が地獄そのものと言ってもよいくらいでした。加えて、罰直という制裁があり、バツターという野球のバットのような棍棒で、お尻をいやというほどぶちめされるのです。その棍棒は海軍精神注入棒と呼ばれ、そこには「憎しとて叩くにあらず竹の雪」と墨書されていました。「竹を叩いて積もった雪を落とし、竹が折れないようにする。練習生を叩くのも、過酷な戦地で死なないようにするための。」との意味が込められているので、叩かれる方はたまったものではありませぬ。叩かれたお尻には青あざがで、ト

イレに行っても屈むことができないくらいでした。班対抗の競技に負けた時はもちろん、一人がミスしても、一人の失敗が部隊全員の死につながるの理由で連帯責任をとらされて、全員が制裁を受けました。殴られるだけならまだ軽いほうで、30分以上腕立て伏せを続けさせられたり(練習生の汗で床が水をまいたようになり)、練習生を延々と走らされたこともあり。軍律に違反するような行動が見つかると、それこそバツターの乱打に見舞われました。そんな時は痛さと悔しさと泣いても涙も出ませんでした。倒れるように吊り床に這い上がって毛布をかぶるとしみじみ家が恋しくなりましたが、猛訓練で綿のように疲れ切った体はいつの間にか眠りかけていました。



戸張礼記氏(予科練記念館歴史調査員)と赤とんぼ(93式中間練習機)

猛訓練

主な訓練には体操・武道・1万m走・棒倒し・ラグビー(闘球)・水泳・相撲・滑空訓練・カッター(短艇)・陸戦・射撃・通信(モールス通信・手旗信号・光信号・旗旗信号)等がありました。競技はすべて班対抗(時には分隊対抗)で行われ、負けると罰直が待っていました。

「1万m競走」は土浦の桜川堤防まで

の往復。全員がゴールしなければならず、一人の落伍者も許されません。最下位の者の班が最下位となるので、走れなくなった者を、他の班員が抱えながら走り続け、体調を壊し、下痢をしながらも走り続けていた生徒もいました。「1万m競走」はまだ走るだけで済みませんが、「棒倒し」や「闘球」は敵味方に分かれての戦いですから、汗みどろ、血みどろの戦いとなりました。「闘球」は海軍独特の球技で、ラグビーボールを使用していましたが、ラグビーのような複雑なルールはありません。要するに、どんな手段を使ってもよいから、ボールを相手陣地に持ち込めば勝ちというもの。敢闘精神を養うためとのことでしたが、喧嘩も同然の激しい競技でした。「水泳」は50mプールで行われました。クロールのように速さを競うものではなく、できるだけ長時間泳いでいられるように平泳ぎができれば良いということでした。海軍ですから軍艦の舷側の高さから飛び込めなといけないので、プールには5m(戦艦の舷側の高さ)と3m(駆逐艦の舷側の高さ)の高さの飛び込み台があり、そこから飛び込む訓練も行われました。5mともなると水面が光って、目がくらみ足がガクガク震えます。後ろから押されるように、無理矢理飛び込まされましたが、横腹をしたか打ち付けて、息もできないほど痛い思いをしました。11月3日頃まで水泳訓練が行われ、霜柱を踏んでプールに行ったことを覚えてます。先輩たちは霞ヶ浦横断などの遠泳も行っていました。私たちの頃はそういう余暇はありませんでした。このプールは武器学校内に戦後しばらく

残っていて、土浦三高生が年に数回体育の授業で使用していました。「相撲」は勝ち残りではなく、負け残り。体の小さい者はいつ終わるか分かりません。最後は倒れて気絶したふりをするしかありませんでした。「滑空(グライダー)訓練」は、第2練兵場(精進川左岸、現霞ヶ浦高等学校から大岩田の一本松付近まで)で行われましたが、これは水を得た魚のように楽しいものでした。出来ないう生徒は教官にどやされ、棒で殴られるので苦しかったようですが、私は中学時代に滑空班に入っていたので、グライダーの操縦には慣れており、教官からよく褒められました。「カッター」(正式名称は短艇)は、14人乗りのボートで左右に漕ぎ手が6名ずつ、後部に艇指揮(カッターの指揮者)と艇長(舵手)が乗っていました。長さ4メートル余、重さは15kgもある櫂は、握るのもやつという状態で、さらに水中の櫂は、前後のリズムを合わせて、両手と言うより、全身で漕がないと思うように動いてくれません。慣れないうちは、腕は棒のようになり、尻の皮が向けて、血がにじみ、手は豆だらけになります。また、カッターには櫂立てという敬礼がありました。これは艇長の号令により、乗員全員が一斉にオールを垂直に立て、艇長は起立して挙手の礼を行うというのですが、最初は櫂がスムーズに立てられず、悪戦苦闘、冬場の寒いときには櫂から垂れてくる雫が凍っていました。精進川(花室川下流部)河口部に小型舟艇やカッターの発着所(ポンド)があり、カッターを吊り上げておくダビッドが並んでいます。訓練は全員の呼吸が揃わないとオー

ルを流されたり、前後のオールとぶつかってしまい、そのたびに怒声が飛んできました。しかし、帆走するときにはオールを漕がなくてよいので、とても爽快でした。「陸戦訓練」は重い銃を担ぎ、重装備で何kmも走らなくてはならないので、苦しいものでしたが、娑婆に出られる喜びがありました。夜は一般の民家に分宿するので、家の人がご馳走をしてくれました。手野の民家に泊まったときは白米のご飯に天ぷらでした。霞ヶ浦のえび、ゴロの天ぷら、おいしさの余り食べ過ぎて気持ちが悪くなり、吐いて枕を汚してしまいました。戦後、お礼とお詫びにと訪ねたのですが、どの家だったか分からず、今でも申し訳なかったと思っています。肉体的な苦しさはないのですが「通信訓練」も大変でした。1分間に80字の速さでモールス信号が送られてくるのを聞いて、それをカタカナで80字詰めの原稿用紙に記入していくのですが、勘を働かせないと信号を取り切れません。2、3字すぐ抜けてしまいます。1字取り損ねると、バツター1本を食らうので、いつも震え上がっていました。このように予科練習生たちは、全てにわたって敢闘・忍耐・機敏さに加え、強固な体力が求められました。入隊当初は無我夢中で、必死に頑張り続けてきた彼らも、日がたつにつれて猛訓練にも慣れ、逞しく成長していきました。

(2014・12・24 高5回飯村弘、高21回鴻巣茂・松井泰寿が予科練記念館でお話をうかがいました)

(高21回 松井泰寿)